

# 機会利用型セラピー

2012/12/16 名古屋定例会

藤坂龍司

## はじめに

数年前からつみきの会で「機会利用」ということがよく言われるようになってきた。

「デスクで教えるだけが ABA ではなく、日常の機会を利用して教える方法もある」

「デスクで教えると自発しにくいから、機会利用で教えた方がよい」

「デスクで教えると日常生活に般化しないから、機会利用で教えた方がよい」

こんな風に言われているようだ。

しかしその割に、「機会利用」の中身がはっきりしない。日本語の語感からは、外出の機会をとらえて靴の履き方を教えたり、お風呂のときに服の脱ぎ着を教える、といった身辺自立の指導も含まそうだが、「機会利用」をいう人たちは、主にことばの指導を念頭に置いているようだ。

またロバースでもデスクで教えたことはすぐに日常生活に般化することになっているが、その般化トレーニングと機会利用はどこが違うのかもよくわからない。

日本で「機会利用型指導法」と訳されているのは、**incidental teaching** である。**Incidental**には「付随的」「偶発的」という意味があり、むしろ「付随的教授法」と訳した方がよいのではないか、と思う。ここでは「インシデンタル・ティーチング」と原語のままにしておく。

最近、邦訳の出た **Fovel, The ABA Program Companion**(邦訳: J. タイラー・フォーベル「ABA プログラムハンドブック」)にこのインシデンタルティーチングがわかりやすく整理されている(ただし翻訳は誤訳が多い)。そこで今回はこのフォーベルの整理にしたがって、インシデンタル・ティーチングとは何かを解説することにする。

## 1. インシデンタル・ティーチングとは

### (1) 元々の意味

日本で「機会利用型指導法」と訳されているのは、「**incidental teaching**」と呼ばれる ABA の手法である。「機会利用」と訳すと意味が誤解されやすいので、ここでは「インシデンタル・ティーチング」と原語のままにしておく。

インシデンタル・ティーチングをはじめに言い出したのは、**Hart & Risley (1975)**である。ハート&リズレイは、経済的に恵まれなためにことばが遅れがちな黒人の子どもたちのためのプリスクールで、子どもたちにことばを教える試みを行なった。

彼らはロバースと違って、子どもを個別訓練するのではなく、プレスクールの集団教育の枠組みで子どもにことばを教えようとした。特にどうやったら子どもたちに、単なる物の名前だけでなく、形容詞と名詞の組合せ(特に色+物)を使わせることができるか、という課題に取り組んだ。

最初はサークルタイムに、先生が子どもたちに色を教えた。「この車は黄色よ。タイラー、この車は何色?」「黄色」といった具合に。しかしそれだけでは、子どもたちは自由遊びの時に自発的に色+物の組合せを使わなかった。

そこで今度は自由時間に遊びに使うものを全部ケースにしまっておいて、それを「色+物」の組合せで言えたら、初めてそれを出してもらえるようにした（「黄色いつみき下さい」）。すると子どもたちは「色+物」の組合せを急によく使うようになった。

この方法を、ハート&リズレイは「インシデンタル・ティーチング」と呼んだ。彼らによると、「インシデンタル・ティーチングとは、自由遊びのような構造化されていない状況で、自然に生じる大人と子どもとのやり取りを通じて、子どもに何かを教えること」である。具体的には「子どもが大人の援助を求める機会を利用する。」「インシデンタル・ティーチングはことばの教育に最もよく用いられる。」

つまりここではインシデンタル・ティーチングは、自由遊びで子どもが何かを要求してきた機会を利用して、子どもに主にことばを教える方法、という意味で使われている。「マンド・トレーニング」と呼ばれている方法とほぼ同じだろう。

## （2）フォーベルによる再定義

最近、フォーベル（Fovel, 2002）はインシデンタル・ティーチングを次のように再定義した。

フォーベルによると、インシデンタル・ティーチングの本質は、子どもにとって楽しいメインの活動に付随して、それを強化子として、こちらが教えたい標的行動を教える、というところにある。

インシデンタル・ティーチングでは、メインの活動は子ども自身に選択させることが多い。自分で選んだ活動は、大人が選んだ活動よりもしばしば本人にとってより魅力的であり、高いモチベーションが期待できるからだ。

例えば子どもがあるおもちゃに手を伸ばしたとすると、それを渡す前にそのおもちゃの名前を言ってやってまねさせる。まねできたら渡す。あるいは子どもがビデオを見ているときに、大人が画面の前に立つ。子どもが「どいて」と言ったらどく。子どものモチベーションが高い活動をうまく捉えることで、その活動の強化子としての力を活用できる。

しかし必ずしもメインの活動を子ども本人が選ぶ必要はない。セラピストが楽しい活動をセッティングして、それに子どもを「乗せて」もよい。子どもが乗ってきたら、その中に標的行動をうまく組み込んで、引き出して行く。

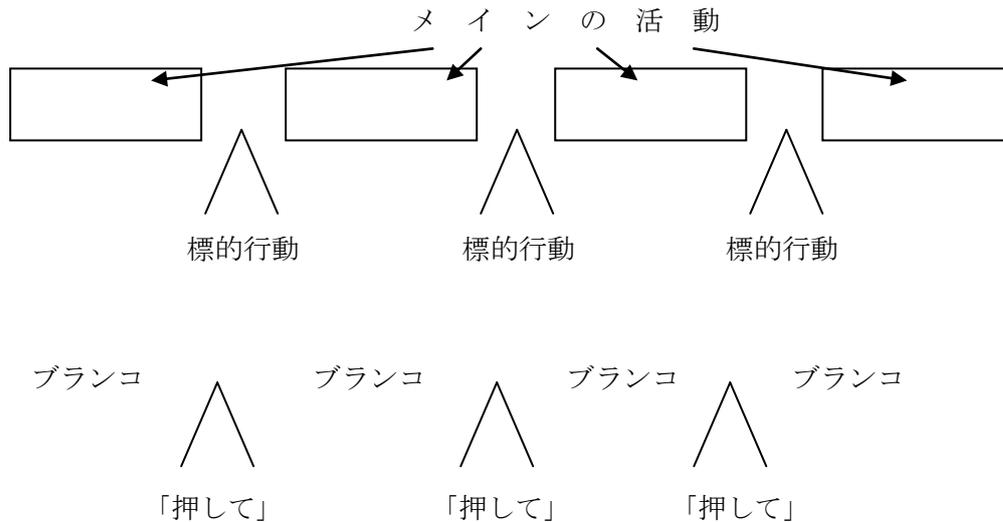
要はまずメインの楽しい活動があり、その一方で、こちらが教えたい標的行動がある。その標的行動をうまくメインの活動に組み込み、付随させる。例えば上記の例のようにメインの活動を中断させてもよいし、もっとうまく活動に組み入れて、メインの活動を継続するためにはどうしてもその標的行動を行わなければならないようにしてもよい。

このようにすると、標的行動を子どもが行なうことが、ただちに子どもにとって楽しい活動の継続をもたらすので、取り立てて外的な強化子を用意しなくても、それ自体が強化子になって、標的行動が強化される。

フォーベルは次のように言っている（原文からの訳）。

「インシデンタル・ティーチングにとって本質的なのは、その時子どもが熱心に行なっている活動があり、その継続が他の（付随的な）活動にとっての強化子となる、ということである。それは子ども主導の活動でも大人主導の活動でも起こりうる。」

「（子どもが）従事し、参加を継続する可能性が高い活動は、それが誰が主導したものであっても、より可能性の低い（付随的な）行動を強化するために利用することができる。これは「プレマックの原理」と言われるものである。」（Fovel, p.74）



注：プレマックの原理とは「高頻度行動は低頻度行動を強化する」というもの。人や動物が高い頻度で従事する（要するに好んで行なう）行動を、低い頻度で行なう（余り好まない）行動の直後に行なわせるようにすると、それによって低頻度の行動の生起頻度が増える、という現象をプレマックは発見した。

## 2. 何を教えるか

### (1) マンド・トレーニング

インシデンタル・ティーチングで一番教えやすいのはマンド（要求表現）だろう。例えば食事やおやつ時間に、追加をほしがるたびにその物の名前を言わせたり、「ちょうだい」と言わせたり、ことばの言えない子には「ちょうだい」サインをさせたりすることができる。

遊びの時間にも、例えばシャボン玉を一つ吹いて見せるたびに「フーして」と言わせたり、ジャングルジムに登りたがっているが一人では怖いときに、「手伝って」と言わせたりすることができる。

### (2) マンド以外への応用

しかしインシデンタル・ティーチングで教えられることは要求表現だけではない。例えば子どもがいろんな色のつみきを積んでいる機会をとらえて、追加のつみきを欲しがるたびに、つみきを一つ見せて「何色？」と聞くことができる。つまり要求の機会を使って、色などの概念を教えることができる。

また社会的な表現も教えることができる。例えば「どうぞ」と言いながらつみきを渡し、子どもが「ありがとう」というまではつみきから手を離さないようにすることで、「ありがとう」を言わせることができる。

ことばだけでなく、動作模倣や音声指示も教えられる。例えばすべり台で遊んでいるときに、登り口のところで大人が制止して、「こうして」と言って動作をまねさせ、まねできたら通してあげるようにすればよい。

社会的な行動を教えることもできる。例えば人気キャラクターの着ぐるみと握手する機会をとらえて、列に並ぶことを教えることができるだろう。おやつ準備のために、お友だちと協力してテーブルを運ぶ行動を教えることもできる。

### 3. インシデンタル・ティーチングを用いる場面

#### (1) 幼稚園・保育園での利用

幼稚園・保育園の活動の場面で何かを教えることがすべてインシデンタル・ティーチングなのではない。インシデンタル・ティーチングが成り立つためには、その活動が本人にとって魅力的なものである必要がある。

例えば自由遊びの時、子どもがすべり台をすべりたがっていたら、その機会をとらえて何かを教えてみよう。何度かすべらせて、もう一度滑るためにはしごを登ろうとするときに、制止して何かをさせる。できたら制止を解いて、梯子を登らせればよい。教えることは、

- ・まだことばがなければ、目合わせか、ちょうだいサイン
- ・エコーがあれば、「どいて」「シューする」などの要求表現
- ・単語の要求ができるのであれば、「すべり台、したい」などの二語文の要求
- ・「ここどこ?」「何するの?」などの質問の弁別
- ・列ができていたら、列を守る練習
- ・スリーヒントクイズ（答えたらすべらせてあげる。スフィンクスみたい）

など、子どもの能力によって変えるとよい。

プロンプトの仕方は普通のセラピーと同じ。最初はフルプロンプトで徐々にフェーディングしていく。例えば「どいて」と言わせたいのであれば、最初は「どいて」と言ってやってまねさせる。次は「どい・・・」という。次は「ど・・・」、次は「ど」の口ばくだけ。最後は何も言わない。

朝の会や設定遊びはインシデンタル・ティーチングにあまり向いていないが、設定遊びが子どもにとって十分魅力的なものであれば別である。例えばノリノリで工作をしているときだったら、「はさみちょうだい」「のり貸して」などの言葉を引き出せるだろう。

#### (2) 家庭での利用

##### <マンド・トレーニング>

家庭で要求の機会をとらえることはそれほど難しいことではない。何か食べたい時に「ちょうだい」と言わせたり、お外に行きたいときに「お外・行く」と言わせればよい。

ただ、要求を大人に伝えなくてもたいいの用が足りてしまう子どもがいる。その場合にはわざと要求の機会を作りださなければいけない。

例えばおもちゃを全部子どもが開けられない箱の中に入れておく。手の届かないところに棚を作って、そこにおもちゃを全部上げておいてもよい。開けられなくて（あるいは届かなくて）困っているのを見つけたら、「あけて」「取って」と言わせて（あるいは「ちょうだい」サインをさせて）開けて（取って）あげる。ただしおもちゃを一つ取りだしたらふたをしめ、もっと欲しいときはもう一度「あけて」と言わせよう。このように強化子を小出しにして、要求の機会をたくさん作りだすのがコツである。

##### <楽しく教える工夫>

何かを新しく教えるとき、あるいはデスクセラピーなどですでに教えたことを復習させるときに、家庭でできる楽しい活動を考えて、そこにその課題を組み込むことができる。

例えば粘土でお団子やおさかなを作り、それを使って覚えたばかりの数を応用してみよう。「お団子、三個ください」「おさかな、二匹ください」もし子どもがそのやり取りを楽しんでいると感じてくれたら、それが自然な強化子となって、数に関する望ましい反応を引き出すことができるだろう。最初はプロンプト付きで。やがてプロンプトを徐々に減らして。

### (3) セラピーでの利用

インシデンタル・ティーチングがこのようなものであるならば、日常生活の中だけでなく、セラピーにも取り入れることができる。

インシデンタル・ティーチング A 型～楽しい活動を中断して何か反応を引き出す。

インシデンタル・ティーチング B 型～楽しい活動に課題を組み込む。

#### <子どもの自発的活動を利用する>

まず休憩時間などに子どもを自由にさせて、子どもが自分で選んで行ない始めた行動を利用して何かを教えることができる。

例えばデスクでの音声模倣に子どもが飽きてしまったら、子どもを自由に遊ばせる。子どもが絵本を取り上げて熱心にそのページをめくり始めたら、めくろうとするところを手で押さえて、何か音を言ってまねさせる。まねしたら手を離してページをめくらせる。新しいページを見ることが強化子となり、特に他に強化子を用いなくても試行数を稼ぐことができる。

#### <楽しい活動をセッティングする>

セラピー時間に本人の好みそうな楽しい活動をセッティングして、教えたい課題をその中に組み込むこともできる。

例えば位置の課題を教えるときに、子どもがその単調さに飽きてきたら、おもちゃのライフル（玉が出るもの）あるいはボールを使って、射撃訓練をさせてみる。テーブルを横にして、標的の動物（たとえばうさぎ）がその上に出てくるか、横に出てくるか、下に出てくるか、子どもにはわからないようにする。セラピストはうさぎを出してはすぐに引っ込める。子どもがこの遊びに乗ってきたら、うさぎを出す直前に「上」とか「横」と言って場所を予告する。子どもがそれを理解してそちらに狙いを定めておくと、うさぎが出てきたときにうまく当てることができる。

## 4. インシデンタル・ティーチングの利点と欠点

### <利点>

- ・子どもが楽しんで行なっている活動自体を強化子にするので、わざわざ強化子を用意しなくても、いつでもどこでも教えられる。

- ・その活動が本人にとって非常に楽しいものであれば、強化子としても強力なので、学習効果も高いことが期待できる。

- ・セラピールーム以外の場所でも比較的自然な形で実施できるので、習得したスキルを日常生活に般化させやすい。

### <欠点>

- ・子どもにとってはあくまで楽しい活動に関心があるので、こちらが教えたい課題にはあまり注意を向けない。そのため、何か新しい課題をじっくり教えるには不向きなことが多い。

- ・子どもに自由に活動を選ばせた場合、その活動に付随して教えることのできる課題を教えるしかないので、課題の選び方がどうしても受け身的に、いきあたりばつりになりがち。

- ・こちらが活動を設定する場合は、上記の欠点は避けることができるが、今度は子どもが興味を持つ楽しい活動をセッティングするのが難しい。またその活動に、教えたい課題をどう組み込むのか、考えるためにはそれなりの発想力を要する。

- ・あくまで楽しい活動がメインなので、こちらの教えたい課題の試行数は少なくなる。だからデスク

セラピーに比べて学習効率が悪くなる恐れがある。

#### <結論>

デスクでの集中指導ができない幼稚園などの集団場面や外遊びなどの自由場面では、インシデンタル・ティーチングはとても役に立つ方法だろう。家庭での日常生活に ABA を取り入れる上でもとても有効だと思う。

しかし家庭療育でデスクでのディスクリート・トライアルをやめてインシデンタル・ティーチングだけにしようとする、学習進捗がかなり遅くなる恐れがある。

ディスクリート・トライアルは日常生活に般化しない、という批判がよくなされる。確かにセラピールームという特別な環境で教えたことは、そのままでは日常場面に般化しない。だからデスクで教えたことは、すぐに日常場面で使わせる必要がある。その際は、インシデンタル・ティーチングを利用してよいし、ほめたり、お菓子などを使って強化してもよい（つまり日常場面にデスクセラピーを持ちこむ）。そうすれば、般化できるのである。

デスクリート・トライアルをすると、指示待ちになって自発が出にくくなる、という批判もよく耳にする。確かに指示や質問ばかりをしていると指示待ちになってしまう。そのために徐々にセラピーの中でも、日常生活においても、指示をフェードアウトして自発を促すのである（叙述の自発、質問の自発などの課題を参照）。

逆にインシデンタル・ティーチングだと活動が楽しくないといけないので、楽しくない活動には般化が起こらない可能性がある。

結論としては、これまでどおり家庭療育はできるだけデスクでのディスクリート・トライアルを中心に、インシデンタル・ティーチングは補助的に使うといいだろう。